

中野重治全集

第十一卷

筑摩書房

中野重治全集第十一卷

一九七九年二月二十五日初版第一刷発行

著者 中野重治

発行者 関根栄郷

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号 一〇一—九一
電話 〇三〇七六五一（営業）

振替 東京六—四一—二二三
例六七一一（編集）

印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

装釘 栃折久美子

第十一卷 目次

楽しき雑談

一

後記

著者うしろ書 一つの文学と一つの過去

五九

解題

五七

楽しき雑談

大学内の研究

小説の三つの種類

二つにわかれた支那その他

眼につく風俗

大事件とその後始末

肉感性の不足

文学における新官僚主義

一般的なものにたいする呪い

農村児童の綴方について

批評と常識

編集のむずかしさ

創り手と受け手との関係

文科大学と作家とは関係あり

政治と作家の問題

三 五 二 六 九 二 三 四 五 六 七 八 九

窓口と奥の間	八
小河内村行き	二
わが文藝時評	三
蕭軍へ	九
曖昧な合言葉	一〇
文学理論喪失の問題	一〇
文学批評家の問題	一九
九月号の創作界	二三
力作のある風景	二八
眞実は下等であり得るか	二六
軍事的戦争と文化的交驛と	二六
一種の傑作主義	二七
条件づき感想	二九
戦争文学者論	四〇
藝術家の分野	四六
報告文学とリアリズム	四八

「白衣作業」ノート

感想と希望

ルポルタージュについて

「アイヌ学校」と民族の問題

新劇繁昌の問題

探求の不徹底

現代文藝批評の方法的特徴

自分のことと一般のこと

評論 小説 詩 戯曲

映画 ラジオ 演説

法と詩人

今年度の回顧

文学の読み方

KOKKAI-GIIN NO KOTO

異端と禁欲主義

島木健作氏に答え

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

藝術上の雑文

文学の革新

文士の標準

訂正お願い

現代文学におけるモラルの問題

時局と春

文学に関する哲学者の言葉

ねちねちした進み方の必要

白衣の美

文学者と洞察力

学問上の問題

覗けぬ実情

不満と期待と

批評の精神

このごろの小説このごろの読者

文学の低俗化

二四七

二五三

二五八

二六六

二六二

二六九

二七二

二七八

二九〇

二九二

二九六

三〇〇

三〇六

三二三

三二六

三二九

「文学」における文学と人間との問題	三三
新しい秩序	三三
世俗と文学の世界	三七
トルラーと小熊秀雄	三四五
伊藤整へ	三四七
時代の相違	三五四
雪の下	三五九
未開国と「同盟」	三八六
作と作中の問題	三八八
スポーツと文学	四〇〇
ぼんやりした記憶	四〇四
文学的世相雑談	四〇六
自分で自分に威勢をつけること	四一四
雑文	四一七
藤田嗣治論について	四二二
太郎冠者の言葉	四二三

渡辺直己の歌

楽しい雑談 一

楽しい雑談 二

楽しい雑談 三

楽しい雑談 四

楽しい雑談 五

楽しい雑談 六

楽しい雑談 七

楽しい雑談 八

病気と法律

衣食住雑談

わが読後感

ラジオの宣伝

恋愛と結婚との問題

愛情の問題

入学難の解決

四二七

四三五

四四二

四五五

四五九

四六五

四六九

四七八

四八二

四八五

四八六

四八九

四九一

四九二

四九四

四九七

歆喜力行

四九九

子供のための詩

五〇〇

女の力

五〇五

二人の科学者の言葉

五〇九

「ある『書評』の註」について

五一

批評

五二四

楽しい
雑談

大学内の研究

私は大学のことをよく知らないというよりもほとんどよく知らないというほうがいい。いつだつたか、「大学を語る座談」というものに引っぱりだされて大学に関係ある人びと——教授たち——の話を聞いて非常におもしろかつたことがあつたが、そのとき私としては何ひとつしやべることがなくて困つた。たまに何かしやべつてもそれはその席ではなにさま場ちがい私自身にも感じられたことだつた。

そういうわけで、私は大学のことをよく知らないし、また一般的な問題として大学や大学の現状について考えてみる興味もないのだが、ただこのごろは——いまに始まつたことでもないが——大学というところは大事なところだとは考えている。むろん日本の大学のことでは外国の方のことは全く知らない。

自分の手落ちのようなことを語ることになるが、私がこのごろハイネについて小さな本を書き、そのなかで日本の大学が帝国ドイツの学問的伝統を取り入れた関係上、帝国ドイツで知らわれたこの詩人が日本の大学からも締めだしを食つてきたというような意味を書いたところ、私は木村謹治教授から多少の抗議(?)を受ける結果になつた。ドイツではどうであつても、日本の大学ではハイネを締めだしていない、現にハイネを研究対象にする人が毎年^{おととし}何人かはあるという教授の言葉だつたうえ、京都の大学の方でもハイネ・アーペントの持たれたことなどを友人から知らされたわけだつた。

ここでハイネという人そのものはどうでもいい問題なのだが、とにかく私の文句にはそういう手落ちがあつた。つまり——いま言つたことから直接引きだされるというのではないが(この間接の関係については今ここでは書

けない。——大学の顛落とかいう言葉がジャーナリズムの上へ現われたことがあるけれども、そしてそれにはそれでもつともな理由があつたには違ひないけれども、学問の研究ということについては、大学というところは決して馬鹿にできぬところだと思ふ。藝術というような問題になれば多少模様が變つてくるかも知れないが、歴史的な研究というようなことになれば普通の場合大学を除外するわけには行かぬだろうと考えられる。

私の知つてゐるある歴史研究者がこぼしていたことがあつた。彼は大学における官立の方法とは違つた方法で歴史を研究したいのだが、また彼にとつては、そもそも彼のような方法でなければ歴史の研究はできぬというほかはないのだが、しかしどうしても大学にくつつて行かねばならない。それは、大学を離れたが最後歴史の具體的な研究ということができなくなつてしまふ。大学に籍を置きさえすれば、図書館とか個人の文庫とかいつた方面へも自由に出入りができる。寺の宝物や旧大名の倉庫の中身なども自由に調べることができふ。大学を離れると同時にそういう自由がふいにならなければならぬ。そういうわけで大学から離れられぬということだつた。

ところが去年ころ聞いた話によると、こういう大学自身の内部でさえ新しい問題が起つてきた。というのは、官立の方法そのものすらがいろいろな外部からの干渉を受けるようになったため、いままではそういうことに全く鈍感だつた学者たちまでが遂に刺戟されて、たとえ講壇で発表できないにしろ仕事だけはしておこうという氣になり、おかげで日本歴史の具體的研究などかえつて進んできたというようなおもしろい話を聞いたことがあつたが、そういう研究がそこにあるとすれば、そういうものはあらゆる手段を講じて大事にせねばならぬわけだと思ふ。日本の大学が官立のものとして——いわゆる官立大学という意味ではない。——どういう方向に進んでゐるにしても、そこにはとにかく学問のための有益な資料がある。資料を調理するさまざまな便宜もある。こういう資料や便宜はどこでもあるものでもなく、またそれ自身として人を待つてゐるものでもあらう。日本そのものが、やはり官立のものとしてどういう方向へ進んでゐるにしろ、とにかく国民のめいめいはそのなかで仕事をして行かねばならない。そこで現存の官立日本が与へてゐるすべての条件というものは、善きにつけ悪しきにつ

け十分吟味して大事に取りあつかわねばならない。大学が顛落したとかするとかいうとしてもその大学内部にやはり対立物があるのであつて、大学そのものが丸ごと駄目になつたわけでもなく、また丸ごと駄目にしてはならぬのもあり、いまのところひと口にいうとすれば、學問の發展のため大学を大いに大事にせねばならぬのではないかと思う。

(十二月二十八日)

小説の三つの種類

正月号の雑誌にのつた小説をざつと眺めてみて私は小説の三つの種類ということを感じた。ただし正月号の雑誌全部の小説が三つの種類に分けられるというのではない。だれかも書いていたことではあるが、正月号の雑誌類には実にたくさん短篇小説がのつていて、たとえば『新潮』一部には二十二人の人が小説を書いている。正月号というものは何がなお祭らしい気分を出さねばならぬものらしく、この雑誌もあの雑誌もずらりと名まえを並べるという傾向があつて、五つなり六つなりの雑誌の小説をひととおり読むとなつては大変なひと仕事になるわけであり、それをいちいち読んで批評するとなつては、読むだけでも大変なのだから、せつかくのお祭気分もむこうから御免をこうむるほかはないでいたらくである。

だから私の三つの種類というのも便宜的なもので、眼についたもののなかから次ぎに取りあげる三つの傾向ともいふべきものが氣にかつたという程度である。だからこのほかに第四種のものがあり第五種のものであることを妨げない。ただ私としてはここではそれらのものには触れられぬまでである。またそのほかに詩があり戯曲

がありはするが、少量の紙面で問題を取りあつかう関係上、小説について書くのが一番便利なので小説を取りあげる次第で、小説に現われている三つの傾向ともいべきものは他の種類の文学にも多かれ少なかれ現われているわけである。

さて第一の種類のものは何と名づけたらいいか、あまり厳格な言い方ではないがひとり合点ものでもないというべき種類のものである。こういう名づけ方はもととあまり学問的ではないが、しかし名づける以上は相当の理由がなければならず、また今までの経験からもわかるように、だれか批評家が新しい名まえをつけると猫も杓子も元のものを調べずにそれを借用するということがあつていけないのだが、実例をあげれば『改造』の「二十世紀旗手」（太宰治）とか『新潮』の「恋文」（谷村雅章）とかいった類である。

これらの作品はひとり合点であり拵えものであることを根本特徴にしている。元来ひとり合点とか拵えものとかいうことは何らかの程度ではどの作品にも考えられることだが、これらの作品では、ひとり合点であり拵えものであるということを作作者自身読者に押しつけている、つまりそのこと自身をそもそも作の建てまえにしているというところに本来の特質があるわけである。

「二十世紀旗手」というのは「生れて、すみません。」という副題を持ち、「神の焰の苛烈を知れ」、「ふくろふの啼く夜かたはの子うまれけり」、「ワンと言へなら、ワンと言ひます」というような段落に分かれていて、大体が次ぎのような調子でのべつに書かれているのである。

「苦悩たかきが故に尊からず。これでもか、これでもか、生垣へだてたる立葵の二株、おたがひ、高い、高い、ときそつて伸びて、伸びて、ひよろ、ひよろ、いちけた花の二、三輪、あづき色の華美を誇りし昔わすれ顔、黒くしなびた花卉の皺もかなしく、『九天たかき神の園生、われは草鞋のままにてあがりこみ、たしかに神域犯したてまつりて、けれども恐れず、この手でただいま、御園の花を手折つて来ました。そればかりでは、ない。神の昼寝の見事な寝顔までも、これ、この眼で、たしかに覗き見してまゐりましたぞ。』などと、旗取り競争第一